

# 黄色の灯火の点滅

小さい頃は、自分が特別なんて思ったことはなかった。

何かになりたいとか、なりたくないとか考えたこともなかった。

たしかに、幼稚園の卒園文集には「なりたいもの」という欄があつて、そこには「ケーキ屋さんになる」なんて書いてあるのだけど、それだって、私はべつにケーキ屋さんになりたいと思つてそう書いたわけじゃないんだ。

「——テイちゃんは、大きくなったら何になりたいのかな」

先生は、そんな風に聞いたんだと思う。

「別に……。だつて、なりたい物なんてないもん」

「えーテイちゃん、なりたい物がないの？ そっかー、じゃあ、好きな物は？」

それで、私がケーキって答えたら、

「ふうん、そっかー。テイちゃんはケーキが好きなんだね。じゃあテイちゃんは、ケーキ屋さんになりたくないじゃないかな？」

そこで私がいまいにうなずいたものだから、私の「しょうらいのゆめ」は、ケーキ屋さんになったんだ。「好きだけど、でも好きなのと、なりたいのは違う。」本当はそういう意味のことが言いたかったのだけど、その頃の私には、表現する言葉が分からなくて、悔しい気持ちだけが、小学校に上がってからも残った。ケーキは好きなのだけど、人にケーキ好きって言うとき少し躊躇するようになった。

高校生になった今でもケーキはもちろん好きで、学校では製菓同好会なんていうクラブの部長をやっているのだけだ。「テイちゃんケーキ屋さんになるの？」なんて言われると、そんな時には幼稚園の文集のことを思い出してしまつて微妙な気分になる。

もちろん、今は高校生だから、言葉に詰まつてしまつたりなんてしないけれど。

「うーん、ケーキ屋さんもいいけど、私はたぶん毎日毎日人のためにたくさんケーキ焼くなんて、性に合わないと思うから。またこんどにしとく——」

そうすると、えーこんどつていつだよ、とか、来世だよ来世、とかそんなことを言いながらはしゃいでいるうちに話が変わるんだ。

窓の外は雪景色。

そういうえば、高校でも卒業文集を作るみたいだ。先週で原稿が締め切りになったから、今ごろは印刷所に届いているのだろう。うちは進学校だから、二月にはみんな受験のために札幌や東京やいろんな所を飛び回ることになる。それが一段落すれば、三月、卒業式のころには、文集が出来上がっている——と、そういう算段なわけだ。

この文集にも将来なりたいたいものを書く欄があつて、私はそこに「数学者」と書いた。変わり者だねつて言われる気がするけれど、実際なりたいたんだからかまわない。——と言いたいところだけれど、本当の本当になりたいたいのかつて自問すると、だんだん分からなくなつてくる。本当はケーキ屋さんになりたいたいんじゃないかという気さえしてきて、ちようどこの間から、駅に製菓学校が入学者募集のポスターを出しているものだから、私はその掲示板の前を通るとき、どうして足早になる。

私も今日からは受験旅行で一週間の東京。一人で道外に出るのは初めてなのだけれど、不思議に不安はない。少なくとも、旅行それ自体には。たぶん、他に考えることが多いから、旅行の不安なんて感じてる余裕がないのかもしれない。それに、これは鉄道旅行で、もう乗つてさえいれば東京に着くのだから。——間違えるとしたら、乗つてる列車が間違ひだった、とかそういう話になつてしまう。

そういう根本的な意味でなら、不安はいくらでもあるのだけれど。でもとりあえず、東京に行くための乗り物を飛行機ではなくて列車にしておいたのはラッキーだったと思う。ニュースによると、ゆうべからの関東の雪で、羽田行きの飛行機は朝から欠航になつた。

寝台車に乗るのは初めてだけれど、思ったよりずっと快適でよかった。鍵も掛かるし、窓もある。暖房も利きすぎなくらいに利いている。天井はちよつと低だけれど、寝てしまえば窮屈な感じはしない。それに個室。他人のことを気にしないで過ごせるのは、ずいぶん気楽でうれしい。長い旅なんだから少しは、はしたない格好だつてしたいし、興が乗ればきつと私ははしたないことをする。

いつもの赤いセーラー服はベッドの上のハンガーに吊るした。受験に行くときわざわざ制服なんて着なくてもいい、と言われたのだけれど、この制服も、受験が終わればもう、卒業式くらいしか着るときはないのだから。そう思うと、ダサイと言われ続けたこの赤のセーラーにも、なんだか愛着が出てくる気がした。いつも膝が見えるまで巻き上げて穿いていたスカート。

小学校で背の順が一番後ろだつた子は、ふつう中学で追いつかれて埋められると言うけれど。私はその例から漏れたみたいで、髪が伸びるのおなじくらいに身長も伸び続け、一七〇センチを超えたところようやく止まった。それで、私はこの身長に見合うほど足を長く見せたくて、スカートの裾は、パンツが見えない限界まで高く上げていたんだ。

セーラーのスカートの丈よりも髪の毛のほうが長いのは、学園の歴史上で私だけなんだそうだ。本当かどうか知らないけれど、とにかくそう言われて、ちよつと自慢に思っていたのが懐かしい。傷みやすい銀髪をここまできれいに伸ばすのは、実はけっこうな苦勞なんだ。だから、髪のことを褒められると、素直に嬉しいし、歴史上で私だけだなんて言われると、かなり光榮な気分になる。

もしも何かの手違いでこの髪をばつさり切つたら、毎日の手入れもしなくて楽になるのだけれど。

「入試に向かう列車の中では、もうあまり勉強はしないで、ゆっくり好きなものでも読んでいるほうがいい。」——先生にそう言われたから、漫画の本なんかも少し持って来たのだけれど、なんだかそれを読むと数ヶ月の集中力が一気に切れる気がして、結局暇つぶしは単語帳になった。読み飽きた単語帳だから、もう知ってる単語ばかりだけれど、私は勉強ではなくて暇つぶしをしているんだからそれでいい。東京まで飛行機なら三時間だけれど、鉄道では十七時間の長旅になる。暇つぶしも必要だ。

午後八時。今ほどのあたりを走っているんだろう。まだ青函トンネルをくぐってはいないようだけれど。予定では、これから列車はひたすら南下して、明日の昼前に東京の上野に着く。試験はあさつてだから、少しなら遅れても問題ない。

\*

予約していた時間に合わせてシャワー室に行くと、ロビーに人が一人だけいた。金髪の青年だ。こちらに背中を向けているから、よく見えないのだけれど、きっと誰か一緒に来ている人がまだシャワーを浴びていて、ここで出てくるのを待っているんだろう。

その人が小さな声で歌を歌っているのに気づいて、私は声を掛けた。

「ウタウさんなんですか？」

こんなところで同じウタウに出会うなんてずいぶん嬉しい偶然だと思つて、ついはいやいでしまったのだけれど。青年がびくつきとして振り向き、戸惑つたような顔をしたので、冷静になった。

「あ、急にすみません。その……、私もウタウなんです」

きつと、誰もいないと思つて、つい歌つてしまつていたんだらう。歌えるんですねとか、そういうことを言われるのを迷惑に思う人は多い。まさかつたかと思つたけれど、青年はにこやかに応じてくれた。

「へえ、こんなところで奇遇だね！　そう、僕も歌声持つてるんだよ。でも、ウタウじゃないんだ。僕は、ボカロで」

「そうなんですわね！　失礼してすみません……ボカロさんに会うのは私、初めてです」

襟元には、へ音記号の形の飾りが揺れている。ウタウだつて数千人しかいない少ないものだけれど、ボカロはもつとずつと少なくて、数十人しかいないって聞く。

「いやいや、気にしないで。歌声を持つてるつていえば、たいていはウタウさんだものね。こんな同じ列車に二人、歌声持ちが乗り合わせたのも何かの縁かな。——東京へ？」

青年はごく自然に雑談を振つた。シャワー室から同行者が出てくるまでは帰れないのだろうし、私もシャワー室が空く時間までここで待つのだろうかから利害は一緒だ。

「そうなんです。大学の受験で」

「へえ。音楽大学？」

ちよつとだけ返答に詰まつて、今はそういうことにしておこうかとも思つたけれど、嘘をつくのは嫌

だから正直に言った。

「いえ、数学なんです。私、数学者になりたくて」

すると青年はびくりしてみせたけれど、すぐにまた笑顔になった。

「そうなんだ。それはぜひ健闘を祈るよ、りっぱな数学者になれるといいね」

「ありがとうございます。でも……」

でも、青年が想像したように、歌声を持って生まれた数少ない私たちは、普通ならシンガーになるのだろう。シンガーにならずに大学に行くというなら、それはきっと音楽大学で、卒業後はやっぱりシンガーになるんだろう。分かっている。よく分かっているのだけれど、そこで私はあえて数学科に行くんだ。

きっと初対面の人に話すようなことではないのだろうけれど、この人なら私の悩みを分かってくれるかもしれないと思った。

「私は、たぶん本当はシンガーになるべき運命だったんだろうって思うんです」

毎年、新しく名前をつけられて生まれてくる数千万のいのちの中で、歌声を持つのは、千とか二千に過ぎないのだから。そういう特別な生まれを持って、つまり、なろうと思えばシンガーになることができる存在でありながら、なぜか大学に進んで数学を勉強したいなんていうのは、私のわがままじゃないんだろうか。与えられた素質を無駄にして、関係ないことに人生を使うのは。

「母は、いいんだよって言うてくれるのですけれど」

母がどう考えるところか、私がどう思うかとか、そういう個人的なレベルで誰かが許したり許されたりで

きる種類の問題ではないのは分かつてる。

「私って言う人間がウタウとして生まれたからには、シンガーになるのが自然の摂理なんじゃないのかって。それを曲げてまで私は、数学をやる。それが正しいんだろうかって思うと、考え方が分からなくなってしまうんです」

一気にたたみかけた私の話が止むと、青年はやさしくうなずいて、少し考えてから口を開いた。

「たとえば、北海道から東京に行くためには、夜行列車もあるし、他にも飛行機とか、フェリーとか、新幹線乗り継ぎとか——本当にいろいろな方法があるよね」

青年は急にそんな話を始めた。唐突な話題だと思っただけれど、私の目を見て、私に分かるように一つずつ区切って話すから、とりあえず私も、一つずつうなずきながら聞いた。

「どの方法でも、東京にはたどり着ける。でも、そのとき東京にいる君はちよつとずつ違ふと思うんだ。東京に着く時間も、それまでに見たものも、おなかの中に入っている物も」

そして言葉の切れ目ごとに、私がうなずくのを確認してやさしく笑った。こんなふうには理路整然と話す人は好きだ。

「何か経験をするっていうことは、わずかでも考えが変わることだから、たとえば本一冊読んだあの君と、読む前の君は違うし、窓の外の看板の文字ひとつだつて、ごくわずかだけれど君に影響を与えらる」



それなら、今こうやって初対面の人と話をしていることだつてたぶんそうだ。この話をした自分と、しなかった自分を比べたら、きつと少しだけ違いがあるんだろう。

「だから、もしまばたきしていて看板を見逃したら、看板を見ていた場合と比べて、君は別の人になるわけだよ。もちろん、ごくわずかの違いなのだけれど、でも同じではない」

私は、かろうじてうなずいていた。

「北海道から東京に行くためには、飛行機や、新幹線乗り継ぎや、フェリーや、寝台特急。いろいろな方法がある。どの方法でも東京にはたどり着けるけれど、そこにいる君はちよつとずつ違う。着く時間も違うし、手に持っている物も多分違う。考えていることなんて多分もつと違う」

「お待たせ、レン君」

シャワー室のドアが開いて、青年の連れらしい女の人が出てきた。青年と同じような黄色い髪を横で一つに束ねて、紫色のゴムで止めながら。青年は「やあ」と笑い、女の人からシャワーの道具を受け取りながら、私に話し続けた。

「今、たつた今この瞬間にも僕たちは分岐し続けているんだよね。無数の選択肢の中から一つを選ぶという行為を瞬間ごとに行っている」

それらのうちのいくつかはデッドエンドだろうし、ひよつとしたらこの人と私が恋に落ちるルートだつてあるのかもしれない。

「そう考えると、今この時点に生きている僕とか君っていうのは、これまでに選ばれてきた数多くの選択結果の羅列であり、同時にこれから選ばれることを待っている無数の選択肢の集合に違いない」

レン君と呼ばれた青年は、彼女さんらしい女の人と一緒に客室に消えた。私は今空いたばかりのシャワー室に入り、シャワーの機械を作動させる。

自慢の銀髪を濡らさないように頭の上にまとめて裸になり、暖かいお湯を浴びると、ここが列車の中だというのが不思議な気持ちになる。通学の電車と同じがたんがたんという震動を聞いていると、こんなあられもない格好で東京行きのレールに乗っかっているのだと思うと場違いな感じがする。

「ね、だから、ただ単にたまたまこの世界の君は大学へ行くっていうだけのことだよ」  
去り際に青年は言っていた。

「並行世界のうちで別の世界の君は、別の年に別の場所で生まれ、別の人と知り合うだろう。君の生まれに使命があるとしたら、それは別の世界の君が達成してくれればいい。シンガーになる運命の君もいるし、そうではない君もいる」

きつと別の世界では私は今頃、欠航のニュースに不安になりながら千歳に向かっているのかもしれない。また別の私は苦小牧のフェリーターミナルで船出を待っているのかもしれない。飛行機とフェリーに両方乗ることはできないけれど、飛行機に乗る私も、フェリーに乗る私もどっちもいて、そういうのをぜんぶあわせて私っていうものなんだ。多分。

体を洗うためにシャワーを止めると、ちょうど壁の向こうで踏切を通り過ぎる音がした。息をする間にも数え切れないほどの私に分岐していく。予定通りに。その中でこの一つの私はたまたま東京に行つて数学科の学生になる私なんだ。別の世界でケーキ屋さんになるのも私、シンガーになるのも私。

それでいい。それでいいから、私は早く部屋に戻つて、さっきのやさしかった青年のことを思い出しながら何かしよう。夜はまだ長い。東京は遠い。

きいろ どうか てんめつ  
黄色の灯火の点滅

平成 26 年 6 月 29 日 初版第一刷発行

著・発行・印刷 ひのいいか  
日野 飯香 (iica@live.jp)

©2014 Hino Iica. Printed in Japan.